

**J** **apanese text**

2017年 春/夏号 日本語編

**Works**

**櫻**

画・文＝篠田桃紅

p.009

墨による表現を極めてきた美術家が、日本の春を象徴する桜に寄せる深い思い。今号では岐阜現代美術館に所蔵されている、篠田桃紅筆の作品をご覧いただけます。

木のそばに、貝を二つ並べた下の女、をさくらという木の文字とした、古代のひとの心ははかり難いけれど、おしはかる筋道が全く無い、というわけでもないような……。

組み込まれた「女」の仲間である私は、「櫻」の字を見ると、見る度に、何となく心が波打つような、一種ふしぎなものに打たれる感じを持ちます。

岐阜現代美術館所蔵

写真提供／岐阜現代美術館

**口絵**

**天高く願いを届ける鯉のぼり**

写真＝ainoa 文＝編集部

監修＝渡辺要市（ワタナベ鯉のぼり）、日本人形協会

p.012

鯉のぼりは、男の子の誕生を、天におわず神様に知らせる目印。祝福と守護を願い、端午の節句に空へと高く掲げる習わしは、江戸時代から始まったといわれている。悠々と空を泳ぐその姿は、日本の五月の風物詩でもある。

戦場で自らの陣の目印とし、守護神の加護を願った旗指物。江戸時代となり世間が平和になるにつれ、その旗指物の上についていた職<sup>のぼり</sup>に鯉が描かれ始めた。伝えられるところでは、中国の登竜門図がそのルーツとなっているらしい。鯉が大きな滝を登って竜になるという伝説にあやかり、和紙に描いた鯉を空に揚げるといふ風習が始まった。風に乗ってダイナミックに泳ぐその姿の勇ましさ、滝を登る立身出世への思いが込められた鯉のぼりは、季節の変わり目を祝う五節句の一つである5月5日の端午の節句、すなわち男の子の成長を祝うものとなったのである。

鯉のぼりは“屋根より高く”掲げることが重要だといわれる。天の神様に、我が家に男の子が生まれたことを知らせ、祝福と加護を願うのが鯉のぼりの意義だからだ。和紙から、綿に職人が手描きしたものへ、そして合成繊維にプリントしたものへと時代とともに形態は変化してきた。しかもマンションなどの集合住宅が多くなり、屋根より高く鯉のぼりを掲げることができる家は少なくなってきてはいるが、鯉のぼりの意義と伝統は今も脈々と受け継がれている。

家庭での節句の祝いとは別に、鯉のぼりの雄姿を多くの人に楽しんでもらう季節の風物詩として“川流し”が始まった。これは大量の鯉のぼりを連ね、大きな川の上に渡すもの。屋根より高くはないけれど、群れを成して新緑に溢れた五月の空を泳ぐ鯉のぼりは壮観だ。2011年の東日本大震災の折

には、日本鯉のぼり協会から被災地へ、250 セットの鯉のぼりが贈られた。“逆風に立ち向かう勇気と元気を”。鯉のぼりに込められた復興への願いが天高く届くことを祈りたい。

(p.012)

富士山を背景に力強く泳ぐ鯉のぼり。長い竿の先には矢車、一番上には吹流しが飾られるのが通例。写真＝広瀬フォトオフィス(イメージナビ)

(p.014)

上：戦前は黒い真鯉（父親）と赤い緋鯉（息子）だけだった。父親の背を見て力強く成長せよという意味合いだったが、昭和40年代半ばに起こった第二次ベビーブームをきっかけに、現在は青やピンク、緑などカラフルな鯉が増え、鯉のぼりにもたくさんの家族ができています。

写真＝ゴラズ・ヴィルハー（芳賀ライブラリー）

下：2016年秋まで手描き鯉のぼりを製作していた埼玉県加須市の橋本弥吉商店（現在は閉店）。加須市では毎年5月3日に全長100メートルの“ジャンボこいのぼり”を揚げる加須市民平和祭を行っている。詳しくは加須市役所 [www.city.kazo.lg.jp](http://www.city.kazo.lg.jp) で確認を。写真＝芳賀日出男（芳賀ライブラリー）

(p.015)

昭和49年に日本で初めて、川流しのお祭りを開催した高知県の四万十川。当初は小さい規模だったが、現在では500匹もの鯉のぼりが空を泳ぐ。毎年4月の終わりから5月後半にかけて開催。写真＝満田新一郎（芳賀ライブラリー）